

玉堂名  
 以我名  
 字為  
 名  
 國  
 畫  
 一

喜  
 樂  
 壽  
 長  
 壽  
 長  
 壽





川上鼠邊編輯

上

A 485  
4

48-8214

川上

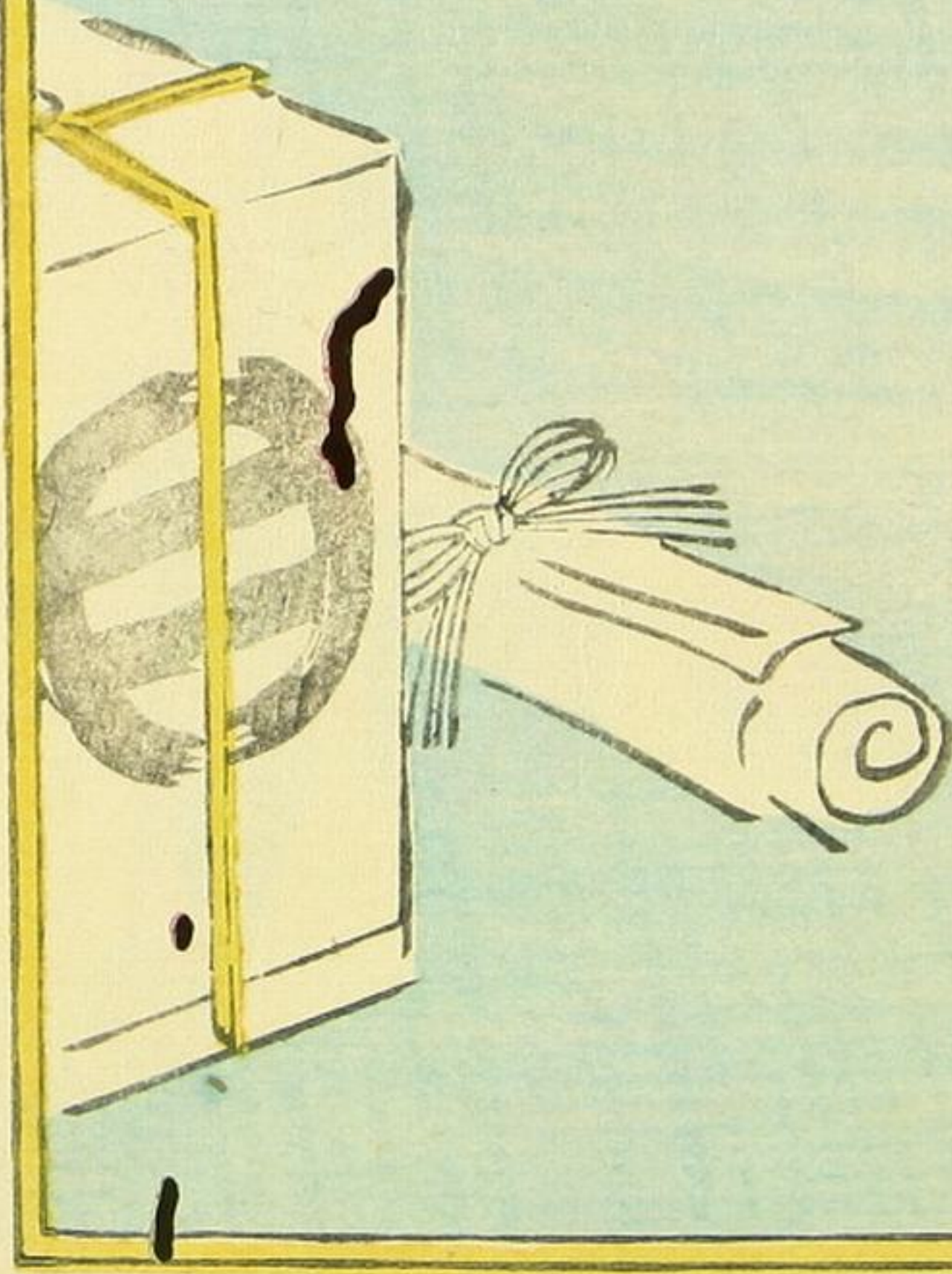
嵐隠編輯

國定忠次

四巻上

義名 高嶋

國定忠次



春秋左氏傳曰一人刑善百姓休和可不務乎と云りさきとを早助が善道  
 へ歸りたるよ寄り飯岡の助五郎鳴神の音右工門等と得脱せしめ其身も  
 まる積悪散トて獄卒の責とせぬ、つら、是は全く歸善の早きふるるに  
 故よ心念不空過能滅諸有苦と觀音經にも解りまう然るも  
 釋迦の十藏閻魔の玄哲闇雲の丑松小猿の傳吉の輩へ佛と縁  
 の名もおへど義よよまどし悲とふし我身と道まんとしと人  
 命と害ふ事少まうを故よ終るの天網白刃の罰とのぐる  
 の道ふし恐るべきの極りあり依て闇眼の記者も心信依  
 あらう大慈第四の巻を綴りて勸善懲惡の道輪迴應報の筋  
 と顯し女菩薩よん内心の鬼又と去しめ男子へ闇夜の入湯戻り  
 よ軒よ行む三途の老女の引手よ乗り地獄の深き入落ると戒  
 め善道よ導らんとして餘慶よとも作者罪障極樂よ春と迎へ



國定忠次  
妻於琴

早助坊顧善



今井小藤  
太包利

目次

開花の時も願  
ハツチ坊主が鉄鉢の米と翻せしよ  
異らざらぬを法談僧  
偽て佛真々々序し畢ぬ

法上録  
西向院の地内

川上鼠邊記

元慶麻子古の

ゆふへつとぬぬ

過去はあけの

用らぬせよ

中死歸道人



次分不更て  
物凄く松吹  
風由春とて  
苔の流石の

と晴た  
穴ふ窓  
次の森顔云

去すしるめては入らぬと秘す  
立てふまぬを切り盡しよ  
安んずるは出でぬるかくて物  
古塔五松十松の口人の者  
掃をんぎ一が明音本所へ

つた名屋といふ小料理屋  
一口中らんとまらう一  
身直へ物言をて出  
来り親方久しくか目ふ

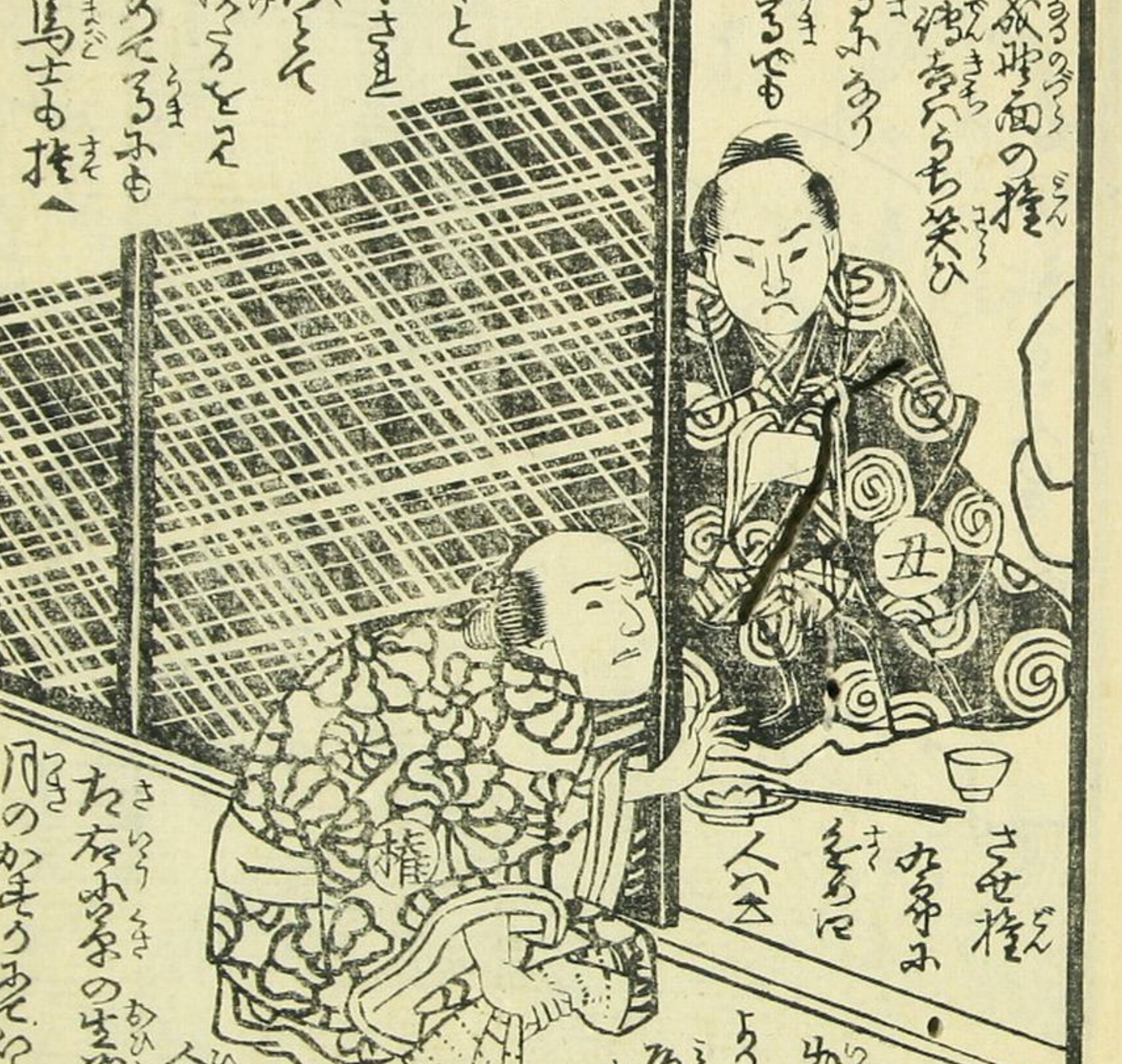
くらざりがゆゆ  
以候を老候  
一と存下まらと  
亭主のつて

つきせト小傳者由挨拶をて  
 空後へ舞うあつらふ後居の  
 弟外と体むるうちふ  
 酒肴と持来さばは  
 十分酒余とを  
 扱とるてをいひかた  
 同由美客とあり渡る  
 大妻あつて一人の男てある  
 平あつて余り多たは  
 小由り  
 我由はるも  
 由あつてさふ  
 との小夫さつては人い



させ権  
 九条ふ  
 人い  
 とを列と  
 と告て立  
 出るあ柄  
 りう十四町  
 乃と別是  
 相生を  
 赤波と  
 並和の  
 命は福を  
 聖なる  
 打笑ひ  
 金を持  
 小判  
 とをせ  
 生理  
 色上り  
 一重版  
 女不  
 酒肴と出  
 表々

紀出るも小友を成此面の権  
 九条とある者あり傳きあち笑ひ  
 権公いゆてのふもふあり  
 といふかふ大なるも  
 ありさつて方の  
 りも由緒とあふ  
 まふ女房の廿二  
 勢りるふたりと  
 戯れり小権九条さま  
 志とよ今相せは  
 りも教多の金と接するを  
 ありとふし  
 ありとふし  
 ありとふし



させ権  
 九条ふ  
 人い  
 とを列と  
 と告て立  
 出るあ柄  
 りう十四町  
 乃と別是  
 相生を  
 赤波と  
 並和の  
 命は福を  
 聖なる  
 打笑ひ  
 金を持  
 小判  
 とをせ  
 生理  
 色上り  
 一重版  
 女不  
 酒肴と出  
 表々





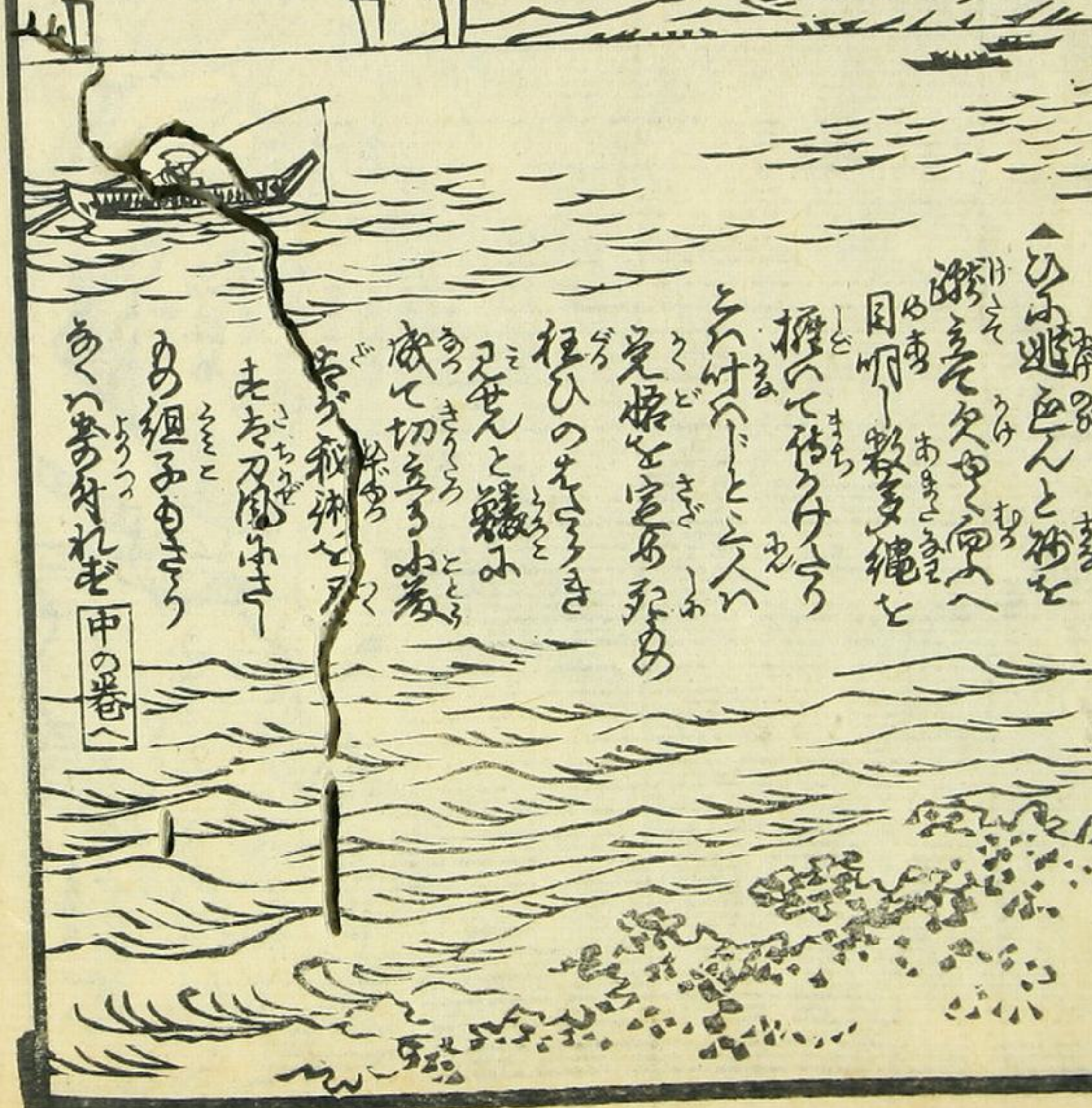








つぎとまんとまると  
 何ひあふ組みの入敷  
 糸とこのたる小虫を  
 縛るたをうもかのり  
 候色の方へ逆ひき  
 昔と考筋由一まんふた  
 と一人の組子縫多  
 ありさると扱ふお  
 まさきと考筋由一まんふた  
 冷うと漬く引例を考  
 考筋由一まんふた  
 切且組子のうとこれ  
 るはる小虫をの候



ひの遊色んと物を  
 目叩く教多縄を  
 握へて持ちけり  
 六竹へ下と入  
 免結を室ありぬ  
 柱ひのそとま  
 又免と縄ふ  
 液て切さる小虫  
 若く飛津と  
 まき又風ふ  
 の組子のう  
 あく考筋由れ中巻

朝鮮

牛肉丸

官許

名法 中包代士身五厘 小包代士身五厘

天泰丸

官許 包代士身五厘

此天泰丸は... 牛肉丸の... 考筋由れ中巻

錦繪問屋

金松堂

日本橋區横山三丁目一番地  
 編輯人 大坂有平氏  
 渡辺義方  
 出板人 辻問文助

出板御届明治三年二月十日







つぎ小  
 友をへ  
 一人とあり  
 後の大浦  
 二方の組の  
 者ふれとあれ  
 終の香袋  
 の氣光進る  
 及い何うとせむと  
 小着たの更ふ必  
 且手は然れども  
 組子たの女を  
 知るべと昔者

女と切り引取とのふたる  
 方へまかたの物と  
 思ふは親の組子  
 是れ  
 忙  
 船と海  
 めき  
 ぬれ  
 少者たり  
 舟とひじく船と  
 舟



あはと小ひく  
 怒り只一人と  
 らちくはまのぞけい  
 天鬼鬼神ふりま早  
 らちくはまのぞけい  
 何よと方より周をつらと法あると小着  
 みの間は流の雲を屋の柳み虎丸の  
 猛威とあるひれははるふ組子自れ  
 毛と魚気あめせんといふとふ  
 着たの女と何ひはる後へいよ  
 と又いふと海へいよ  
 と飛んどうまると見るるふれ

子前の若小春  
 此の傍りこそ  
 伝長なる妻の  
 下男ふん忠次一人  
 何れ用ひたるをまじ  
 くとるまは源次郎  
 あるま侍の刀掛  
 自若とあへると  
 等しく生組  
 全代の園定の  
 化せし振ぎ  
 月と鏡とをま  
 是こそあはれなる



つきとちめ  
 海と途とふ  
 潜りぬを  
 組むぬふ  
 足まじつ  
 けあまねと  
 あがめ居  
 合さる程  
 みの湯に  
 笑ひさる  
 さる程小春  
 久保の山寨  
 忠次と始め

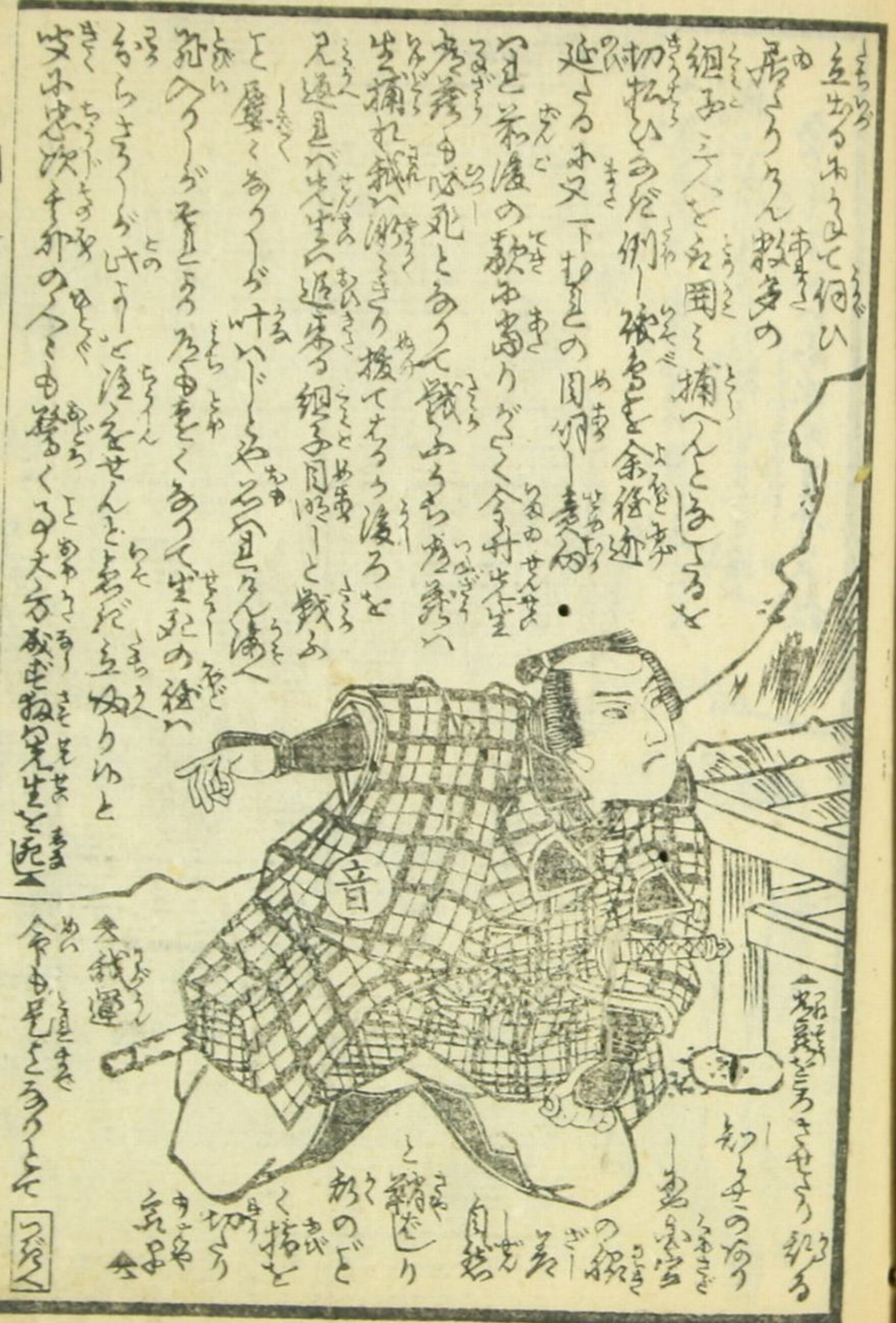






つまよりおかしな  
 土浦家戸を望むより  
 水戸へおを返ね  
 思はどながて  
 まく文火ひま  
 一盞映  
 りんと  
 の酒  
 入り  
 海と香心

先生  
 とうきょうと報



左出るあうはて何い  
 舟よりらん救多の  
 組みこへを死用と捕へんとほし  
 切松ひるだ例一被をも余後迹  
 延るふ又下むとの目切一妻の  
 ひと希後の款おありがご今丹生  
 考考ゆ必死とあつて幾ふち考考い  
 生捕れ我へ溺さる後てちう後ろを  
 兄遠見は先生へ返来る組子目切と幾ふ  
 と慶くあうがけいどちよは且ん満  
 舟へうがそとろろ乃をくあつて生たの候  
 ちらさうがけいどと泣をせんとおだちぬりゆと  
 吹小忠次舟のくち由登くのみ大方おぬ先生と

音  
 命も是とろろとて











つぎ 巻の  
怪びあめあま  
先年親方の  
絶えし一巻  
希帳ゆわろ  
生ご場減ゆ  
五洞  
へ不平  
とま  
あれやう  
絶れは  
いとあふ  
忠次



とびて  
の  
と云  
付る  
勇  
止めおろとの側  
へをこころ探  
とのかゆいゆら  
下巻

近世紀聞  
七編  
以下追々発売

高橋阿傳夜双譚  
八尾編

水錦隅田曙  
三尾編

格調式傳倭文賞  
三尾編

綾里夜紋廻春秋  
三尾編

夜嵐阿見花仇雙  
五尾編

金花七變化  
三十一篇  
次編出版

國定忠次義名高嶋  
初編出版

今文  
地本問屋  
錦繪

金松堂出版  
辻岡文助

出枝御届明治三年正月書

日本橋區横山町三丁目七番地  
編輯人入友清平氏











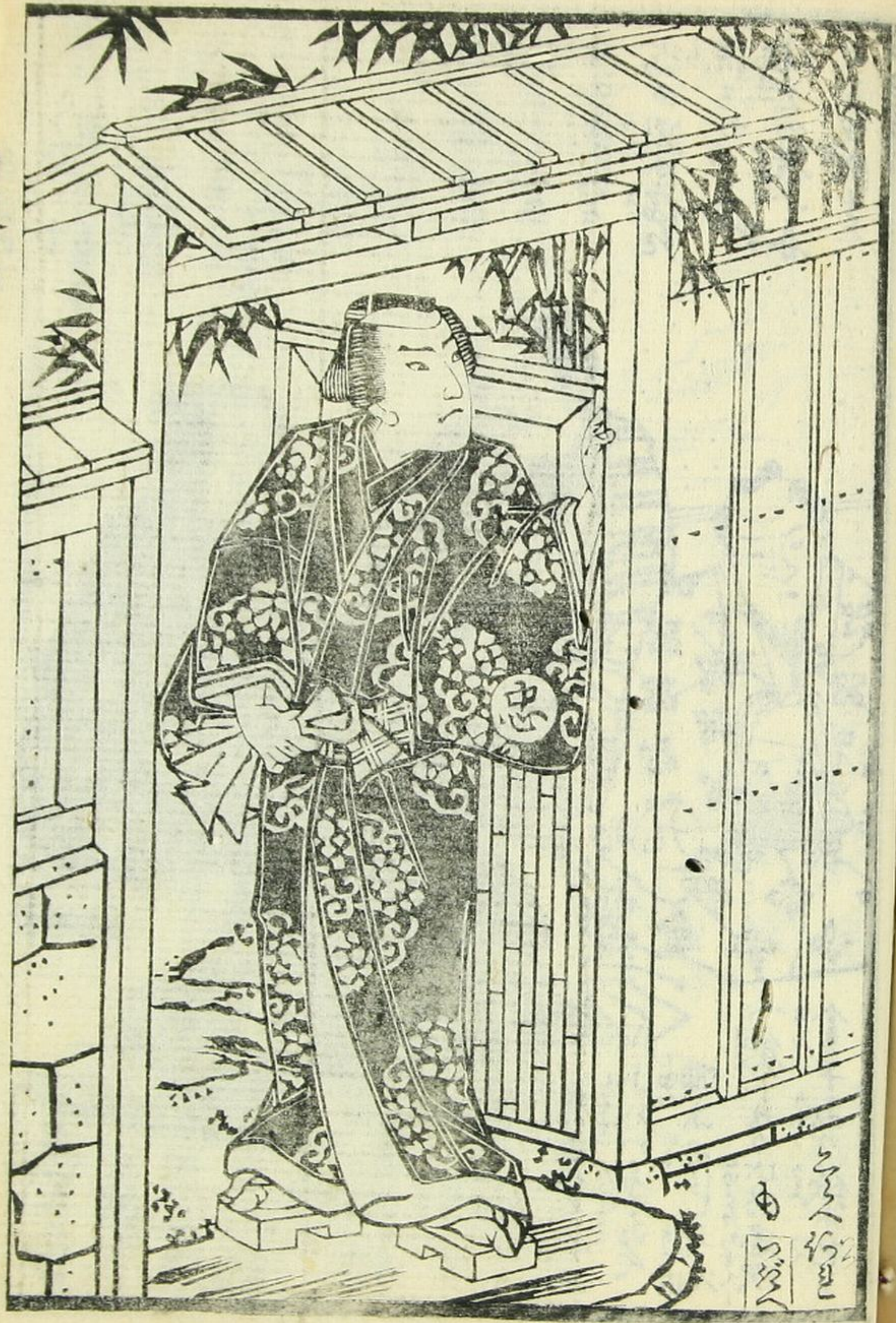


つぎ一若くは忠次が  
 益政のきざり 頼朝  
 ちりぬきおぼしむ男  
 是の洞窟ふまむ  
 らせ海とと交  
 へんはまはるの  
 投きあつて  
 忠次はあ人の  
 命を  
 の

内  
 金一色より物者  
 せよと考ふ海  
 まをぬきの押し  
 名目六海なる

△一ツ金ふた徳右衛門と  
 ちりぬき考ふ小者  
 久げんが眼の  
 生ふ長た徳氏  
 の名宛の紙  
 と我ふ海  
 へ遠くあへん  
 と云ふと

△忠次へ贈ふおと  
 小せきと頼朝  
 松ふゆゆ子細  
 のゆるりとあひ  
 まく小橋中はひ  
 海せんた徳氏と云ふ  
 勇造らぬてあひ  
 おとと贈ふと交度  
 さを標線ささる  
 我つまさらばと  
 忠次へ忠次が  
 物に熱鉄  
 のおのひと



とくは  
 忠次  
 の

望園を尋ねて  
 且よとて金使て  
 立寄る者ありと  
 さへ勇造者あり  
 又ゆへん送る  
 互ひの胸酒の  
 及う遊つての  
 流とと人の  
 必の果は  
 ある測小浮れ  
 流とたよふ  
 体士の持小舟  
 ろうと遊そと



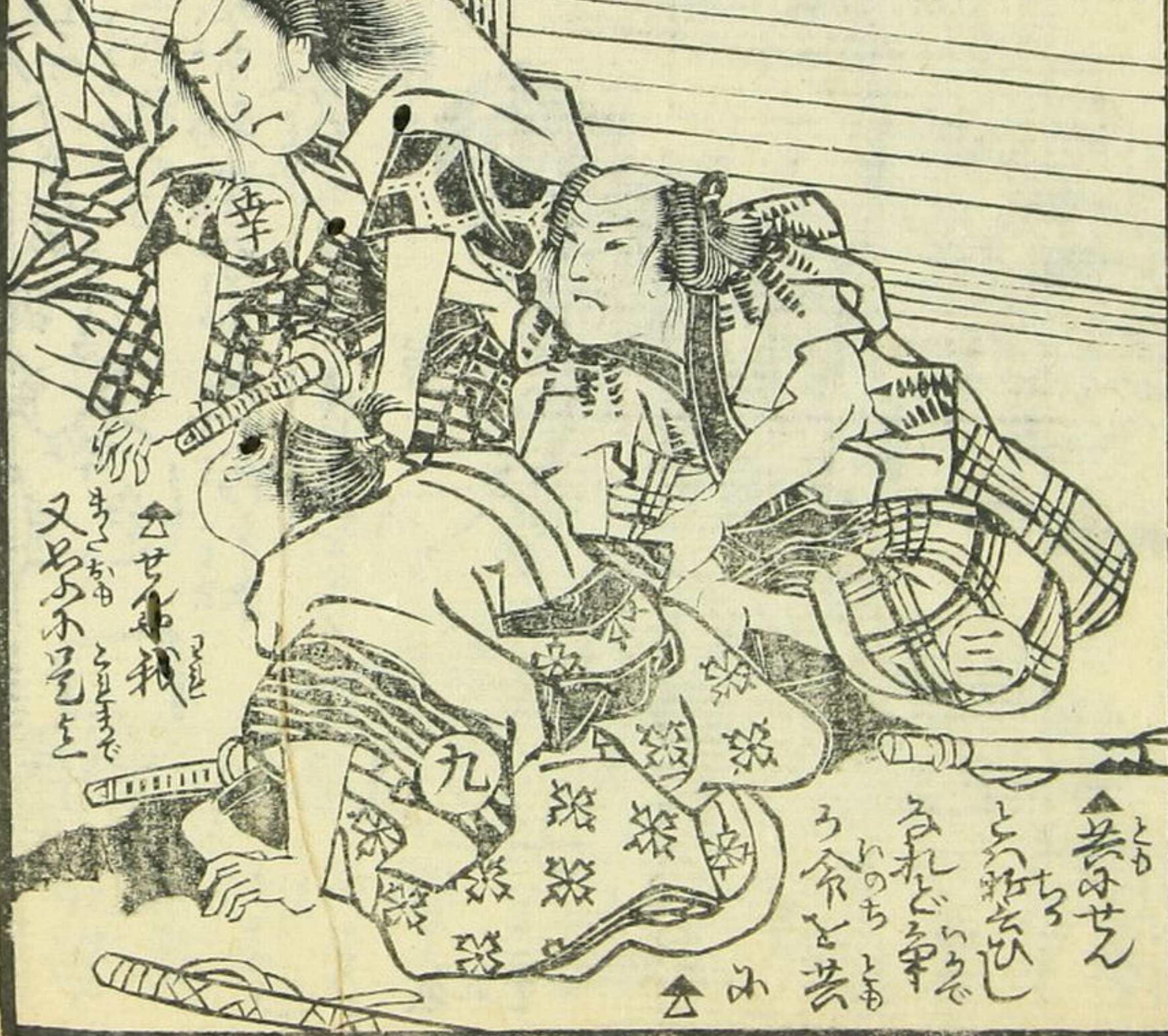
小舟あり  
 さへ小八  
 胸酒の  
 別はの氷  
 流とと人の  
 必の果は  
 小八の文  
 流とたよふ  
 体士の持小舟  
 ろうと遊そと

と定めま  
 志不為く  
 出たりと忠次  
 必の果は  
 流とたよふ  
 体士の持小舟  
 ろうと遊そと



忠  
 志不為く  
 出たりと忠次  
 必の果は  
 流とたよふ  
 体士の持小舟  
 ろうと遊そと

つき 云々よ... 一日山陣  
 と... 安... 切... 血...  
 ... 者へ生死...  
 ... 今山...  
 ... 親方...



云々... 九... 三...  
 ... 幸...  
 ... 又...

ありの... ありの...  
 ... 忠...  
 ... 大...



ありの... ありの...  
 ... 忠...  
 ... 大...

